

金刀比羅宮「奥書院」の障子を開けると、「讃岐富士」が眼前に飛び込んできた！まさに息をのむ美しさであり、かつては別当の私的居住空間として独り占めした贅沢な景色である。このサプライズに思い馳せながら、“椿ウイルス”感染者5人による大人の修学旅行をご報告させていただきます。



3月上旬、岡山から電車で瀬戸大橋を渡り最初の目的地高松に、お昼は駅路地の常連客で賑わう店で“讃岐うどん”と牡蠣の串揚げを食し、先ずはレンタカーで予約を入れた「イサムノグチ庭園美術館」へと向かう。

国道11号線を徳島方面に屋島を越えて左折、牟礼の路地を入った石切り場に駐車場と受付事務所がある。アトリエと彫刻庭園及び晩年の住居がそのまま美術館になっており、アトリエはグスク（沖縄の古城）の城壁のように美しい曲線の石垣に囲まれている。柳の新芽と白壁、それに桃の花のピンクに『椿』の赤が調和した早春の光の中で、整然と展示してあるイサムノグチのオブジェが際立つ。そしてその奥で春野菜に埋もれ畑仕事をしている人の姿が石彫の空間に調和し、なんとも長閑な空気を醸し出している。

白壁に影のはなやぐ柳の芽

住居脇の石段を上りきった庭園入口正面に三本の『藪椿』が横一列に屏風のように植栽されて、逆光の赤花がつつらつつらに出迎える。右手にさらに上った石舞台には大きな桜の木があり、花の時期には様々な宴が催されるとのこと。そして左手から時計回りに登りおおきな土饅頭のような庭園の頂に立つと目の前に雄大な「屋島」が現れる。イサムノグチはこの場所が大好きで、ここで死ねたら本望と話をしていた

と伝わる。全てが撮影禁止の為、写真で紹介できないことが残念であるがアトリエ、展示館、住居跡、そして屋島を借景に高低の変化がある大胆でシンプルなゾーニングの庭園と、イサムノグチならではの造形美を堪能できた美術館であった。また要所に『藪椿』が効果的に配されて、椿ウイルス感染者のひとは今年の愛知国際芸術祭との共催で椿をテーマにインスタレーション特別展を名古屋古川美術館で開催することになっており、黙々と椿をスケッチする姿が印象的であった。

つづいてイサムノグチと交流のあった前衛芸術家「猪熊弦一郎美術館」に丸亀まで急ぎ移動。先駆的で日本のデザイン界にも多大な影響を与えた偉業の数々を一堂に観ることが出来た。夜は再び高松で瀬戸内料理と地酒を堪能し、明日の為に大人は大人しく床に入る。

翌朝、高松城脇の琴電始発駅から一路琴平まで1時間弱の電車旅。途中から右手に「讃岐富士」が見え隠れしこれもまた長閑である。

昨秋はじめて妻と二人で琴平温泉に旅したこともあり、琴平に着いてからは私が道先案内人となる。本宮までの785段の階段を登るため、脚力に自信のない人のために駕籠の手配をし、竹杖を持っていざ出発。365段目の大門で駕籠を降り五人百姓の前を通り抜け、まずは「表書院」まで登る。

また今回は学術研究者が中心メンバーとなっている為、特別の計らいで非公開の「奥書院」も拝観させていただく段取りになっており、書院玄関では金刀比羅宮関係者の出迎えを受けた。

「表書院」は金毘羅大権現に奉仕する別当金光院が、諸儀式や参拝に訪れた人々との応接の場として用いた客殿で、円山応挙による障壁画とともに重要文化財に指定されている。また円山応挙の障壁画はすべて晩年にあたる天明から寛政年間にかけての秀作で、三井家からの援助で制作したと伝えられている。

玄関左手にまずは「鶴之間」、「虎之間」、「七賢之間」、右に折れて「山水之間」、「上段之間」へと続く。虎尽くしとでも言うべき「虎之間」の中で「水呑みの虎」は名高く、表書院の代名詞となっている。この虎の間から観る前庭は蹴鞠をする場所で式木と呼ばれる松・桜・柳・楓が四隅に植えられ、神様が枝に腰かけ蹴鞠を観覧されるとのこと。蹴鞠は県の無形文化財になっている。

諸大名が来訪した際に使われた「上段之間」。NHKの日曜美術館でも紹介されたが、その床の間に描かれた「瀑布図」は表書院障壁画の最高傑作とされ、右の瀧から勢いよく落下し激しく波打ちながら左へと流れ込む河川が描かれ、その水は部屋から実際の庭園の池へと流れ込む構成になっている。庭の池と共に上段から臨む水辺の景色が「下段之間」全体に広がって、応挙のアートディレクション力に圧倒される。池泉の庭は椿が珍しく玉仕立てになっており、彦根城の玄宮園と同様の剪定になっている。さらに右に折れ「富士一之間」「富士二之間」を経て、「奥書院」へのご案内いただく。

別当の私的居住空間の「奥書院」ではまず岸岱筆の「柳之間」に通され、以前は伊藤若冲筆の襖絵であったが劣化が激しく岸岱が上画きした話を伺う。廊下に出て若冲の蝶が乱舞する「菖蒲之間」の前で障子戸を開けると金毘羅像頭山中腹の庭園らしく何も遮るものが無く、刈込剪定で低く揃えた生垣の先に円錐形の姿が美しい「讃岐富士」が現れて讃岐平野を見下ろす本当に贅沢な眺めである。また、柳之間、菖蒲之間には“蚊帳吊具”が四隅に備え付けられており、美術空間でありながらも生活空間であったことを現して面白。

菖蒲之間の奥に「春之間」、右手襖を挟んで「上段之間」がある。この上段之間こそ歴代別当たちの書斎であり私的な謁見をおこなった部屋で、伊藤若冲筆の「百花図」（花丸図とも）がある。広さは6畳に2間床、百花図といわれるがその数201で、紫陽花や蓮、牡丹、菊、水仙、椿、山茶花と多様な花々が虫食い穴もリアルに描かれている。眼を皿にして椿を探すと奥の床貼付け壁の右から2列、下から4段目に、京椿『月光』らしきものを見つけた。このような色華やかな花々に前後左右から覆われ、金砂子地で“黄金色”に輝く部屋の真ん中に座す別当はさぞや威厳に満ちて映ったのではないかと想像する。

ひき続き「高橋由一館」「宝物館」をご案内いただき、金刀比羅宮のご配慮に心より御礼申し上げます。

昼食は資生堂パーラー「神椿」に予定通り立ち寄る。全山『藪椿』が自生する金刀比羅宮には椿がシンボルマークの資生堂が良く似合い、パーラーの白い壁面には白書院に椿の襖絵を描いた田窪恭治氏描く白の陶板と呉須の藍が調和した椿絵が壁一面に展開、食器も白磁に呉須

の椿絵で統一されてまさに椿一色である。店内では金刀比羅宮の代表椿のひとつ『琴娘』の名前が付いた香水も販売されていた。



琴娘

大きなガラス向うに広がる森に抱かれ食事を楽しんだ後、いよいよ本宮へのお参りとなる。ひき続き石段を登ると古い灯籠とともに江戸の昔から変わらないであろう薄暗い原生林に赤い『藪椿』がチラホラと咲き、本宮から眺めた讃岐平野は遥か瀬戸大橋とその手前にシンボルの「讃岐富士」がくっきりと浮かび、定番ではあるが見飽きない大好きな景色である。

春うららどの道からも讃岐富士

下りは裏参道に咲く金刀比羅宮の代表椿のひとつ『琴娘』に会うため途端に足が軽くなる。途中「高橋由一館」裏手の神苑ゾーンは日当たりよく園芸椿が咲き誇り何かと期待をもたせ、そこから観る「讃岐富士」もまた絶景である。さらに坂を下り5分ほど歩いたところに念願の『琴娘椿』が鎮座、なんと日当たりが悪く、薄く色づきはしていたが蕾の状態でなんとも残念であった。何事も首尾上々にいくとは限らず、下り道にも拘らず足取りは重いものとなった。

帰路車中右手に、石垣の勾配が美しい丸亀城とその隣に顔を出す「讃岐富士」を見つけ再びワクワクする。今朝高松の老舗で買い求めた“鯛の蒲鉾”をかじり、たくさんの感動いっぱい大人の修学旅行の締めくくりは“地酒”で乾杯。瀬戸大橋から眺める瀬戸内海の夕日は“黄金色”に輝いていた。